

## 16. 中宮の葬儀と墓制(中宮)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古澤, 哉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4860">http://hdl.handle.net/2297/4860</a>

## 16. 中宮の葬儀と墓制

古澤 哉

- I はじめに
- II 葬 儀
- III 墓 制
- IV おわりに

### I は じ め に

人生における通過儀礼の最後にあたるのが葬儀である。葬儀は、死や死者をめぐる儀礼という宗教的な面だけでなく、それに関わる人々の人間関係や協力体制など社会的な面での意義も大きい。

中宮では、近年まで独自の葬法が比較的維持されていたが、火葬場の変化を期に、大きく変わってしまった。それに伴いムラ人の互助的な役割分担も崩れ、葬儀に関わる人々の関係のありかたも様変わりしている。また、以前は見られなかった墓が昭和に入って建立され始め、今日ではほぼ各戸が所有するなど、墓制の上でも変化が起きている。

本稿では、このような葬儀、墓制における変化を通して、中宮という地域社会の特徴、また社会的な変化をみていきたい。IIでは、中宮独自の民俗がみられた頃の葬儀をとりあげ、その変化について述べる。IIIでは、墓の変遷とその背景についてみていく。

### II 葬 儀

1981（昭和56）年7月、吉野谷村に隣接する鳥越村の瀬木野で、広域火葬場である白山郷斎場の運営が開始された。中宮では、死者が出ると、ムラのサンマイ（サンミヤ、三昧）と呼ばれる火葬場で茶毘に付されていたが、1982年7月N家の葬儀を最後にサンマイは使われなくなり、その後は上記の斎場を利用するようになった。

ここでは、まず、サンマイを利用していた当時行われていた葬儀のできるだけ詳細な再現を試み、次に、その様式的な変化や人間関係における変化をみていく。

#### 1. 葬儀の原風景

中宮では、葬式組といわれるような組織もなく班もないが、ムラ内で親戚関係が複雑にからみ合っているため結びつきが強く、葬儀は、近い親類を中心にムラ全体の協力のもと行われる。

##### i 訃報と悔み

死者が出ると、まず、近い親類と門徒の道場のゴボウサン（道場守）に知らせる。そして、親類や近隣の者が手分けしてムラ中に知らせるが、以前は、夜に死者が出た場合は、門徒道場の朝

のオットメ時のタイコの叩き方が普段と異なり、ムラ人は、これで誰かが亡くなったことを知ったという。

訃報が届くと、ムラの4つの道場のゴボウサン達が門徒を問わず皆、枕経をあげに来る。親類の者は酒や米を持ってトムライに訪れ、他のムラ人はお悔みの挨拶に来る。また、ムラの全戸が香典を贈るが、香典は通夜や葬式の時にもっていくことが多い。昔から、ムラ人同士の間では香典返しは行わないきまりとなっていたらしい。

## ii 納棺

中宮では、納棺前の湯灌や剃髪などは行われない。

棺は、最後にサンマイを利用した1982年当時まで、ドバコと呼ばれる座棺を用いていた。人が死ぬと、硬直が始まる前、まだ体がやわらかいうちに手足を縮め、手を合わせて数珠をかけ、白木綿で首から膝の裏にかけて縛る。このとき死者にはよそいきの着物を着せるが、昔は裸のまま、縛るのに用いたものもナワだったという。死体が硬くなってしまった場合には、祭壇から下ろしたハナ（後述）で体をなでてやるとやわらかくなって楽に縛れるという俗信もあり、これをオハナノタテオロシという。

中宮では、この死体を縮めて縛ることをマルケルといい、またこの語は、納棺全体を意味するものでもある。死体をマルケル役には近親の男性（親子など）が2～3人あたり、その際、自らもナワダスキをかけて行う。

また、マルケヌシという役割がある。これは、マルケル行為には全く手を出さないが、ナワダスキをかけて側に座っている。マルケヌシとは、その名の通り、死人マルケのヌシで、死穢をその一身に受けるような役目であり、さまざまなタブーが存在する。それらは、オヒサンにあたってはならない、風呂に入ってはならない、食事は家族と同じものだが、食器は別、また、この食器は洗ってはならない、自分に関する最低限の行為しか許されておらず、ひとの世話をしたり、ひとの物に触れてはならない、また、タナマイ（食事をする部屋）など家族の者が使用する部屋を通るときは草履をはかなければならない、などである。初七日のナヌカンタヤ（七日のお逮夜）の読経でケガレははれ、普段の生活にもどる。この1週間使用していた食器やてぬぐいなどは、このとき捨ててしまう。

この役にあたるのは、死者の出た家の女性が主である。上記のように、マルケヌシは、その日常生活にかなりの制約をうけるため、あまり家のことに携わらなくてもよいお年寄りになることが多い。これに該当する女性がいない場合は男性でもよく、また、親が死んだときにはその子、子が死んだときにはその親という場合もあったという。

マルケヌシは「行みたいなもの」（75歳女性、69歳女性）で、寝棺を用いるようになり、マルケル必要がなくなったとき、皆喜んだという。「死人をマルケルのはオソロシかったし、かわいそうだった。自分も（死後）ああされるのは嫌だった」という声も聞かれた。

マルケられた死者は、さらしで作った三角の袋に入れられる。これは、親類の者が1針ずつ、結び止めをせずに縫ったものである。そしてドバコに納められるが、ドバコは木製の二重の箱で、外側の箱は喪家が木材を用意し、ムラの大工に作ってもらった。内側の箱は、道場の裏に置いてあったという。

### iii ヨトギ

死亡した日の夜に行われる通夜はヨトギと呼ばれる。

枕経のときと同様、4つの道場のゴボウサンが皆お経をあげに来る。また、弔問に訪れたムラ人は、手分けして葬儀用の飾りものやドバコ、トウロウなど葬具の作製や、翌日の葬式の準備にとりかかる。飾りものは紙製のレンゲ（蓮の花）で、ハナと呼ばれる。作り方はほとんど習い覚えで、ゴボウサンが指導することもあった。

祭壇は簡素なもので、昔は石炭箱などを利用した。ドバコにはさらしをかけておく。

ムラ人の弔問はだいたい午後8時頃までに終わり、その後は10人程の近親者でヨアカンをする。死者の出た家の者は料理に携ってはいらないため、親類の者がかいもちやつくね、おむすび、ぼたもちなどの夜食を作ってもちよる。

### iv 葬式、ノオクリ、火葬

ヨトギの翌日、正午頃から葬式が行われる。

4つの道場のゴボウサンが皆お経をあげる。ゴンゲンサンと呼ばれる手次の寺の僧侶を呼ぶ場合もあるが、これは以前は、オヤケのような豊かな家だけがそうすることができたようだ。ゴンゲンサンを呼ばない場合は、それぞれの門徒のゴボウサンが導師をつとめる。

遺族、親類は家の中で焼香し、他のムラ人は外に用意された場所で行う。

遺族および親類の者の喪服は、男性はカミシモ、女性はイロと呼ばれる紋付に、顔をみせないように白い絹のカタビラをかぶる。冬場はこれにモンペ、フカグツをはく。他のムラ人は普段の格好のままである。

葬式が済むとサンマイへ向かう。これをノオクリという。

昔はドバコをウチシキで包んで担いだが、後にカンを使用するようになった。カンは輿で、鳳凰などの飾りのついた高価なものである。これに金襴のウチシキをかける。ウチシキは道場のものを借りることが多いが、オヤケでは各家で所有しているところもあった。

カンには杉の棒が渡され、ムラの男性が20人程で担ぐ。葬列は、トウロウ持ち — ハナ持ち — ゴボウサン（ゴンゲンサン）、喪主 — カン — 遺族、親類 — ムラ人（男性） — ムラ人（女性）の順で、トウロウやハナを持つのは男性の役割りである。また、このとき、トウロウにはロウソクをたてるが火はつけない。以前は、親類やムラ人たちが、道筋にムシロを敷いて座り、葬列を見送ったこともあったという。

サンマイに着くと、再びお経があげられ、茶毘に付される。サンマイは露天で、昔はムラの外

れに数ヶ所あったが、後には中宮の集落から隣の尾口村尾添へ通じる道の途中にあるものが主に利用されるようになった。戦前、コンクリートで作られる前は、石を積み上げその中で焼いた。ドバコの上に木炭8貫（4貫2俵）をのせ、ワラをさしこんで焼くが、以前は死体をドバコから出し、さらし袋の状態で火葬したという。その際、ドバコは壊し一緒に焼いた。また、昔は木炭が6俵ないときれいに焼けなかったため、サンマイの近くにある坂は、ロッピーウザカと呼ばれていたという。

点火は近親者（親子など）がアサギの束に火をつけて行う。トウロウやハナなどの葬具も一緒に焼いてしまう。これで人々はサンマイから引き上げ、点火から3～4時間後の夕方、数人の親類の者が焼け具合を見に来る。

葬列に加わらない女性は、ノガエリの人々のための料理の準備をする。その内容は、ふき、にんじん、しいたけ、ぜんまい、豆腐などの煮しめ、大根やにんじんのなます、くるみみそ、あざみのおつゆなどである。このとき塗りのお膳台を用いるが、オヤケなど裕福な家は朱塗り、そうでない家は黒塗りで、各家40人前程所有しているという。道場を営むA家では100人前程も揃えてあったそうだ。

#### v 供養

茶毘に付した翌日の朝8時頃、近親者数人でオコツヒロイを行う。「本当の骨（コツ）」といわれる歯やのど仏など一部の骨だけを骨壺に納め、残りの骨や灰は1斗缶や石炭箱に入れサンマイの周辺や自家の畑の隅などに穴を掘って埋める。骨壺に納めた骨は仏壇に置かれる。男性は49日、女性は35日の精進明けの後、京都のオヒガシサン（東本願寺）や手次の寺に分骨される。

初七日までは毎日門徒のゴボウサンがお経をあげ、ムラ人をよんで馳走する。その後は7日毎に読経があり、お茶菓子を出す。最終の精進明けの日はオタイヤモウシといい、再びムラ人を招待し、煮しめ、ぜんまいの煮もの、なますなどの御膳でもてなす。

つづいて百ヶ日の読経で一応の供養を終える。法要は、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十五回忌、三十三回忌、五十回忌であり、五十回忌で弔い切りとなる。

精進日の間や命日には、肉、魚、卵などのなまぐさものを食べることは禁じられており、現在でもお年寄りの中には、これをかたく守っている人もいるそうだ。

また、死者の出た家の者に対して、正月や祭の際、特に戒めはなかったそうだ。葬式の日柄にしても、友引きのタブーなどはなかった。

#### vi 補足

中宮には1950年代頃まで出作りの風習があり、山で亡くなる人もいた。その場合もムラで葬儀を行うが、出作りに出ていないムラに残っている人々で協力して行っていたそうだ。

また、生まれて間もない子どもが死んだ場合は葬儀もごく簡単なもので、火葬する場合もあったし、箱に入れてそのまま土葬する場合もあったという。

## 2. 葬儀の変化

葬儀そのものの変化について述べる前に、まず、臨終の場面の变化ということにも触れておく必要がある。「昔、病気しても医者にかかれるのは、家の主とか大切な人だけだった」(66歳男性)といわれるように、以前、中宮では医者にかかる余裕もなく、また医者のいる鶴来から遠く道も悪いため、家の主以外の者が医者に診てもらえるのは死ぬときぐらいのものだったという。ほとんどの者が自宅で死んだ。1960年代後半以降、道路が整備され交通が発達すると、シモの病院への通院、入院が容易になった。それに伴い、次第に自宅で死ぬ者は減り、今日では、ほとんどの者が病院で死を迎える状況である。

死は日常生活の場から遠ざかってしまった。また、近代的で清潔な病室での死は、死穢という感覚を希薄にするのかもしれない。中宮の葬儀の内容からも、新しい葬法の受容に際し、死穢に関わる独自の習俗が消滅してしまった。それでは次に、その葬儀そのものの変化についてみてみよう。

先にも述べたように、中宮の葬儀は、火葬場の変化をきっかけに大きく変わった。その様式的な面での変化についてみると、最も顕著なものとして、棺の変化があげられる。前述の通り、ムラのサンマイを利用していた頃は、ドバコと呼ばれる座棺を用いていたが、白山郷斎場を利用するようになってからは、そこの設備に合わせ、寝棺を使用するようになった。寝棺になると、もちろん、死者をマルケル必要もなくなるわけで、従ってマルケヌシも、それに伴う従来の風習も、これを期にぱったりとなくなってしまう。宗教的な民俗レベルでの変化というものは、なかなか受け入れられないような感じがあるが、マルケル役やマルケヌシの役は、もともと中宮の人々にとって疎ましいものに思われていたため、この変化はむしろ肯定的に、かつ積極的に受け入れられ、大いに歓迎されたようである。火葬場の変化により、死に関する民俗は、このようになくなったものがある一方、斎場の営業日の関係で友引きの日には葬儀が行われぬなど新しくもたらされたものもある。

また、火葬場の変化は、同時に葬祭業の参入をもたらした。現在、中宮の葬儀に携っているのは鶴来町のY葬儀社であるが、この葬祭業の参入がムラ人の役割分担に大きな影響を与えている。ムラで死者が出たとき、ドバコやハナなどの葬具を作ったり葬儀の準備をするのは、ムラの一員としての務めであったが、今では、棺から喪服にいたるまで一切の葬具は葬儀社によって整えられるようになった。また、斎場まで霊柩車が走るようになり、以前の葬列の風習も途絶えた。葬列にはムラ人の協力が不可欠であり、特に冬場は、カンジキで雪を踏み固め幅6尺程もある道をつくったり、サンマイの雪をどけたりするのに、多大な人手が必要だったという。葬儀の際の食事にしても、現在では仕出しをたのむ場合が多く、または食事を出さない場合もあり、簡素化している。

葬儀の行われる場所も、以前はそれぞれの家であったが、最近では道場を使用する場合もでて

きた。数年前、東手の居住者は東の道場で、西手の居住者は西の道場で葬儀を行ってはこの案が出され、ムラの規約でも、門徒の如何を問わず、希望すれば東西いずれかの道場を使用することができることになった。しかしながら、道場ではそれぞれの門徒のネマリバ（座る場所、オヤケージナゴ、ホンケーショタイデなどイエの階級性に関係する）が決まっており、なかなかうまくいかないという。ムラに残る階級意識がここに垣間見られるようである。

その他に、葬儀への参加者の変化もみられる。シモへの移住、職業の多様化などに伴う生活圈、交際範囲の拡大により、それまでほとんど中宮のムラ人だけで行われていた葬儀に、村落外からも個人的つきあいや仕事関係といったさまざまな人間関係の人々が参加するようになった。これらムラ外の人々には香典返しが贈られることもある。また、シモへ移住している人々の多くは、中宮で葬儀が行われるときは必ず参列し、香典を贈るとう。シモで亡くなった場合も、中宮で葬儀をあげる場合が多い。

以上のように、中宮の葬儀は、ムラの伝統的なサンマイから近代的な斎場へ火葬の場が移ったことをきっかけに、さまざまな面で変化がおきた。葬法の変化は、旧い方法にみられた独自の習俗の消滅をもたらし、民俗レベルでの平準化がここ中宮においてもみられるようになった。また、葬祭業の参入により、葬儀における地域共同体としてのムラ人の互助的な役割分担・協力体制は弱体化したと思われる。一方、食事については婦人会で賄ってはどうかという案がでていることにみられるように、それまでの血縁、地縁といったものから、組織的な協力体制への変換がおきているようにもみえ、葬儀はより合理的で能率的なものになりつつあるようである。かつては「1人死ぬと1年間食べるものをもっていく」といわれた程費用もかかっていたが、現在では、ムラの規約にも、区内では花輪、生花等は贈らない、お通夜にはお酒、お菓子等は出さない、七回忌までは引出物はしない、などの取決めがあるように、簡素化が努められている。

中宮の人々にとってこれらの変化は、「楽になった」「改善された」というように肯定的にとらえられており、こうした意識はこれからの葬儀をより合理的で簡素なものにしていくと思われる。そこには、葬儀における死穢の感覚や畏怖、悼みといったものより、死者の処理という実際の側面の比重の増大がみられるのではなからうか。

また、葬儀への参列者の変化は、中宮という地域社会と地域外の社会との関係の変容といった、より大きな範疇での問題に伴うものとしてとらえることができよう。

### Ⅲ 墓 制

中宮には、もともと墓はなかった。墓をもたないムラというのは、浄土真宗（大谷派）の普及した地域にみられるようで、同じ白山麓の尾口村や白峰村の例が報告されている。中宮もその1例である。

Ⅱで述べたように、中宮では火葬の後、一部の骨だけを拾い、残りはサンマイの周辺などに埋

めていた。拾われた骨は本山や手次の寺に納められてしまうため、納骨所としての墓を建立する必要はなかった。また、サンマイは単に遺体処理場と考えられており、骨を埋めたとはいえ、サンマイに詣る風習はなかった。それが現在では、ほとんどの家がそれぞれの墓を所有しており、調査中も、墓詣りや墓の手入れをするムラ人の姿がみられた。比較的短い期間で中宮に定着、浸透したと思われる墓という施設や、それにともなう概念、風習は、どのような背景によってもたらされたのであろうか。ここでは、墓の登場から今日のムラ人の意識に至るまで、その変遷を追っていく。

中宮に現在のような形態の墓が建てられるようになったのは昭和初期のことである。調査できた墓の中で一番古いものは、1937（昭和12）年建立のものであった。この墓を建てたFさん（84歳男性）本人から当時の話を聞くことができた。

50年程前まで中宮の人々は冬の間、京阪神方面に出かせぎや女中奉公に出ており、そこに住みつく者もいた。Fさんの先祖の中にもそうして京都で一生を終えた人がおり、その人の墓があると聞いたFさんは、ある時墓詣りに出かけた。そして中宮の自分のところにも墓を建てようと思ったという。最初は、田や畑から出た大きな石を積み上げて作ったが、「ずっと継いでもらいたい」と思い、木滑の石屋に冬場の豪雪にも耐えるという墓石を見に行った。当時、墓石はとても高価なものであったが、1937年、現在に残る墓を建立した。5代程の先祖を祀っているという。

Fさんと同時期に建立された墓は、ほぼ同じような理由によるものらしい。当時、墓を建てるにあたりイエの階級性などは関係なかったというが、経済的なこともあって、やはりオヤケなど裕福なイエに限られていたようである。大火（1945年）以前に墓を所有していたのは10軒程だったという。また、カンジャ道場では、門徒の人々が1つの墓を共有するといった「総墓」にあてはまるような形態がみられた。

戦争および大火の後は「墓などの場合じゃなかった」（66歳男性）らしく、この時期建立の墓はみられない。

1960年代に入ると再び墓の建立が始まり、1970年頃から1980年代前半にかけて盛んになった。今日の中宮の墓の大部分はこの時期建立されたものである。

この1960年代以降というのは、中宮の社会が次第に変容していった時期でもあった。1つには通婚圏の拡大がある。それまではムラ内、もしくはせいぜい近隣のムラ人との婚姻がほとんどであったが、この頃から通婚圏は鶴来町や金沢市内をはじめ、他府県にまで及ぶようになった。また、シモへの移住が始まったのもこの頃からであり、中宮の人々の生活圏、交際範囲は急速に拡大し、村落外の人々との交流も増えた。「シモの方からお嫁さんが来たり、シモに嫁いでいく人も多くなって、そっちでは墓詣りなんかもあるのに、中宮には墓もないというのはなんだから…」ということで、墓を建てたところも多かったという。これと時を同じくしておこる高度経済成長による経済的な余裕が、墓の建立をうながしたものと思われる。

このように、中宮における墓の登場、普及は内発的、宗教的なものというより、外部の社会との交流による概念、風習の流入、それを実行する経済的な余裕など、むしろ外的、社会的な要因によるものが大きかったとみることができよう。そこには、当初、墓そのものが祖先祭祀の対象として不可欠であるという感覚は希薄であったと思われるが、次第に新たな意識が形成されていったようである。

墓がなかったということは、祖先崇拜の意識や、祖先祭祀の行為、あるいはその対象物がなかったということを意味していない。墓を建立する以前、祖先祭祀の対象は主に仏壇であった。中宮では仏壇のことをオオドシと呼ぶが、どの家にもかなり前から立派な仏壇があったそうである。Fさんの家にもかなりのものがあり、立派な仏壇をもつことが一種のステータスでもあるかのような印象を受けた。墓を建てると、サンマイの周辺に埋めていた骨を掘り出し、これに納めた。墓誌には明治、大正期からの先祖を合祀しているものが多い。盆には墓前で読経も行われ、冬場以外は、毎月のお詣りや手入れを欠かさないという。シモに移り住んでいる人も、毎月とはいかずとも、詣りに来ている。「やっぱり墓詣りはせんなんし…」「ご先祖様を祀らなければ…」といった声も聞かれるように、中宮の人々にとって墓は、祖先祭祀の対象として定着、浸透し、また、「ずっと継いでもらいたいと思う」というように、イエと同様、継承されるものとして位置づけられているようである。

次に、これらの墓の立地であるが、近年まではまとまった墓地はなく、各戸の土地に分散していた。それらは以下の3種に分類される。1つは集落外で多くの墓がこれにあたり、主に周辺の山林、また、サンマイの近くにも数カ所みられる。もう1つは集落内の畑地周辺、またもう1つは各屋敷地内である。相対的には集落外の墓に古いものが多くみられる。現在ではまとまった墓地が2カ所みられるが、1つはスキー場の開発にあたり山林にあった墓を移転したもので、西の道場を営むH家の土地に門徒を問わず10基余り建っている。この移転を期に新しい墓を建てた家も多く、前述のFさんもこのとき自宅の前の土地に、オーストラリア産の赤い石で新しい墓を建立した。古い墓もその隣に建ててある。もう1つの墓地はカンジャ道場の敷地内にあり、これは門徒の家がそれぞれの墓を所有するようになった結果である。

また、戦没者慰霊碑についても触れておこう。集落の西端に日露戦争戦没者の慰霊碑がある。祀られているのは5人で、「明治42年11月建立」とある。これは戦後極めて早く建てられたといえる。もう1つ集落の中央付近に「忠魂碑」があり、日露戦没者5人、日支戦没者3人、「大東亜」戦没者25人が祀られている。建立は「昭和33年9月」とあり、これも比較的早く建てられたといってよい。慰霊碑は国家のための戦死を称え特別に祀られているもので、イエの継承と結びついた祖先祭祀の場である墓とは一線を画すと思われるが、中宮のような無墓制のムラで戦後早い時期に碑が建立されたのは興味深い。

#### IV お わ り に

以上のように、本稿では葬儀や墓制を通して、中宮という地域社会をとらえようと試みてきた。葬儀の変化は主にムラ内の社会構造の変化と関わり、墓制の変遷は主にムラと外部社会との関係の変容を如実に反映しているものといえよう。それらの変化は、共通して外的な要因の影響を強く受けて生じたものであるといえる。しかしながら、それらの受容過程において、常にムラ人の選択が為されてきたことを見逃してはならないだろう。ムラの変化の主体は、あくまでもムラ人なのである。

これからの中宮は、ムラを越えたより大きな社会の流れの中で変容していくものと思われる。それに伴い、中宮の葬儀、墓制はどう変わっていくのであろうか。